

夏目漱石

模倣と独立



# 模倣と独立

— 大正二年十二月十二日

第一高等学校において—

今日ははからずお招きにあずかりまして突然参上いたしました次第であります。私はもとのこの学校で育った者で、私にとってはこの学校はだいぶ縁故の深い学校であります。にもかかわらず、今日までこういう、すなわち弁論部の御招待にあずかって、諸君の前に立ったことはございませんでした。もっとも御依頼もございませんでした。また遣<sup>や</sup>る気もありませんでした。ただいま私を御紹介下さった速<sup>はや</sup>水<sup>み</sup>君は知人であります。昔はお弟<sup>でし</sup>子で

今は友達——いや友達以上の偉い人です。しかし、  
知り合あひではありますけれども、速水さんから頼まれたわ  
けでもありません。今度私がこゝに現われたのは安倍能  
成しげという——これも偉い人で、やはり私の教えた人であ  
ります。——その人がなんでも弁論部のかたと御懇意だ  
というので、この安倍能成君を通じての御依頼でありま  
す。その時私はお断りをしたかった。というのは、近来  
頭の具合が悪い。というよりも、頭の働き方がこういう  
所へ参って、組織立ったお話をすることに適しないようにな  
っております。——一口に言えば、面倒臭めんどうくさいので、一応

はお断りをいたしたのであります。けれども私の断り方がよほど正直だったので、——ぜひ遣らなければならぬならば出るが、まあどうか許してもらいたい——こういうふうに戻辞をした。ところがぜひ遣らなければならぬから出る、というのです。あとから考えると、あまり私が正直すぎたと思います。もつとも、ぜひ遣らなければならぬと言っているのはどういう訳だ、と言って問い詰めるほどの問題でもありませんから、遣らなければならぬものとして出て参りました。安倍君は君子であります。頼んだ事は引き受けさせようというほうの君子。速水君も

君子であります。これは頼まないほうの君子、遠慮され  
たほうの君子であります。そういう訳で今日は出まし  
たので、演説をするまえに言訳いいわけがましい事をいうのはは  
なはだ卑怯ひきょうなようでありますけれども、大して面白おもしろ  
事もお話はできないと思ひますし、また問題が有つても、  
学校の講義見みたように秩序の立ったお話はでき兼ねるだ  
ろうと思ひます。安倍君曰いわく、何を言つたつてかまいま  
せん、喜んで聴きいているでしょう。

それに、私は此校ここで教師をしていたことがありません。  
その時分の生徒はみなおそらく今ここには一人ひとりもいない



でしよう、卒業したでしようけれども、しかし貴方がたあなたはその後裔こうえいと言いますか、跡あとつぎ見たような子分見たよ  
うなもので、その親分をこの教場でたびく虐いじめていた  
事などがあるから、その子か孫に当るような人などはな  
んとも思っておらるので、チャンと準備をして出て来る  
ほど旨うまくゆかなかった。

私は教師としてこの学校に四年間おりました。のみな  
らずその以前には、貴方がたのように、生徒としてこの  
学校に——何年間おりましたかしらん——落第したと思  
っちゃいけません。もともと私はここへはいつて来たの

じやない。この学校が予備門といつてちようど一ツ橋外ひとつつばしに在ありました。今の高等商業の在ある界限かいわい一面がこの学校兼大学であつた。明治十七年、貴方がたがまだ生れないさき、私はそこへはいつたのです。それから——実は落第しております。落第して愚ぐ図ず々ぐ々ずしているうちにこの学校ができた。この学校ができて最も新らしいところへいの一番に乗り込んだ者は私——だけではないが、その一人は確かに私である。吾々われわれの教室は本館のいちばん北の外はずれの、今食堂になっている、あそこにありました。文科の教室で。それが明治二十二年くらいでした。その

時分の事を今の貴方がたに比べると、吾々時代の書生と  
いうものは乱暴で、よほど不良少年という傾き——人に  
よるとむしろ気概があつた。天下国家をもつて任じて威い  
張ばつておつた。吾々の年配の人は、いつも今の若い者は  
というような事を言つては、自分達の若い時がいちばん  
偉かつたように思っているけれども、私はそうは思わな  
い。今でもそうは思わない。貴方がたの前に立つてこう  
してお話をするときには、なおそう思わない。貴方がたの  
ほうが吾々時代の者よりよほど偉い。先刻さつきから偉い偉い  
ということ速水君が言われましたが、貴方がたの方が

はるかに大人おとなしい、よくできていると思います。吾々は  
実に乱暴であつた。その悪戯いたづらの例はいくらも有ります。  
それをお話するためによゝへ登つたんじゃないが、いか  
に吾々が悪かつたかということを懺悔ざんげするためにお話す  
るのであるから、その真似まねをしちやいけませんよ。現に  
あそこに教場に先生の机がある。まず私達は時間の合間あいま  
合間あいまに砂糖わりの豌豆豆えんどうまめを買つてきて教場の中で食べ  
る。その豌豆豆が残るとその残つた豌豆豆を先生の机の  
抽斗ひきだしの中に入れておく。歴史の先生に長沢市蔵ながさわいちざうという人  
があいる。吾々がこれを渾名あだなしてカップードシアと言つて

いる。なぜカツパードシアというかと、なんでもカツパードシアとかなんとかいうギリシアの地名かなんかある。今は忘れてしまいましたが、ギリシアの歴史を教える時、その先生がカツパードシアと一時間のうち幾回となく繰くり返す。それでカツパードシアという渾名が付いた。この長沢先生の時間と覚えておりますが、その先生がカツパードシアカツパードシアとボールドへ書くので、そのカツパードシアを書くようにしてチヨークを捜すために抽斗を明あけると、その抽斗の中から豆ががらくと出てきたというような話がある。これは先生

を侮辱したわけではありません、また先生に見せるためにわざく遣やつたのでもありませんが、とにかくよほど予備門などにおつた吾々時代の書生の風儀は乱暴でありました。現にこの学校の中を下げ駄たで歩くのです。私も下駄で始終歩いた一人で、今はついでだから話しますが、私がこゝにはいった時にちょうど杉浦重剛すぎうらじゆうこう先生が校長でこゝの呼よび者ものになつていた。この時二十八歳だったかと思ひます。たいへん若くて呼び者であつたが、しばらくするとこういう貼はり出だしが出ました。学校の中を下駄を穿はいて歩いてはいけない。それは当然の事ですが、わざ

わざと貼り出さなければならんほど下駄を穿いて歩いてい  
たものと私は考える。しかるに貼出しがあつてしばらく  
しても、私は下駄を穿いて歩いてきた。ある日のこと、  
ちようど三時過ぎです。今ごろで、もうだれもいまいと  
思つて、下駄を穿いて、威張つて歩けと思つて、  
ドン／＼歩いて行つた。すると廊下を曲るとたんに杉浦  
重剛さんにパタリと出会つた。私は乱暴書生ではない。  
ごく気の小さい大人しい者である。杉浦さんに出会つて  
どうしたと思います。私は急に下駄から飛び降りた。飛  
び降りたばかりではありません、飛び降りていきなり下

駄を握って一目散に逃げだしました。だから一口も叱しかられもせず、また捉つかまえられもせずに済すんでしまった。これはたゞ自分で覚えているだけで人に話したことはありません、今日初きょうめてくらいのものでありますが、このあいだある所で杉浦先生に久々振ひさびさりでお目に掛った。だいぶ先生も年を取っておられる。その時私が、先生こういう事を覚えておいでですか、私は下駄を穿いて歩いてこようだったとお話したら、杉浦さんは、いやそれはどうも大変な違ちがいだ、私は下駄を穿いて学校を歩くことは大賛成である、穿はいちゃあならんという貼出しが出たの



は、あれは文部省が悪い。とかく文部省はやかましいことを言うが、私はその下駄論者だったと言う。私も驚いて、杉浦さんが下駄論者だと仰おつしやるのはどういいうわけですかと聞くと、先生の曰いわく、そもく下駄は齒が二本しかない、それでいくら学校の中を下駄で歩いたところで、床に印する足跡というものは二本の齒の底だけである、しかるに靴くつは踵かかとから爪つまさき先まで足の裏一面が着くじやないか。もしこれが両方とも同じ程度に汚よごすのであるならば、学校の床を汚す面積は靴のほうを下駄よりはるかに偉大である、だから私はその下駄で差支さしつかえないとい

うことをしきりに主張したが、どうも文部省の当局が分わからないから、それでやむをえずあゝいう貼出しをした。それじゃ私は逃げるところでなかった大いに賞ほめられてしかるべきであつた惜しいことをした、と言つて笑つた。その時分は杉浦さんも二十八くらいでまだ若かつたから暴論を吐いて文部省を弱らせたのでしよう。下駄のほうよろしが宜よろしいというわけはないと考えるのです。まあそういうような時代を貴方がたが想像したら、ずいぶん乱暴な奴やつがたくさんおつたということがお分りになるでしようが、実際今よりも悪い悪戯な奴がたくさんおつた。スト

ーブをドンく焚たいて先生を火攻ひぜめにしたり、教場を真闇まっくらにして先生がいきなりはいつてきても、どこも分らないような事をしたたり、そういうところを経過してはじめて此校ここへはいったものがあります。

それから此校に二年ばかりおって、大学に入はいって、だ**いぶ**御無沙汰ごぶさたをして、それから外国に行きまして、外国から帰って来て、また此校へはいった。故郷へ錦を着るといふほどでもないが、まあ教師になつてはいった。そうして初めて教えたのが、今いう安倍能成君等でありま**す**。此校を出て、大学を出て、諸方を迂路うろついている時

に教えたのが、こゝにいる速水君であります。速水君を教える時分は熊本で教員生活をしておつた時で漂泊生ひょうはくせいでありました。速水君を教えていた時分は偉くなかつた、あるいは偉い事を知らなかつたか、どつちかでしょう。とにかく速水君を教えたことは確かであります。形式的に。むろん偉くない人だからほんとうに啓発するほど教えなかつたが、教場に立って先生と呼ばれ、生徒と呼んだことは確かにある。なお自白すれば、熊本に來たてであります。私の前にだれか英語を受持うけもつておつて、私はそのあとを引受ひきうけた。エドマンド・バークのなんとかい

う本でありますが、それは私の嫌きらな本です。このくらい解わからない本はない。演説でもイギリス人が解るものならば日本人が字引を引いて解らないことはないはずである。が、実際解らない本です。その解らない物を教えた時にちようど速水君が生徒だったから、偉くない偉くないという考えがいつまでも退かないのかもしれない。それでその後英語もだいたい教えて年功を積みましたが、速水君に断りますが、その後発達した今日の私の英語の力でも、あのバークの論文はやはり解らない。嘘うそだと思うなら速水君があれを教えてごらんになればすぐ分る。

——こんな下らないことを言って時間ばかり経って御迷惑でありましょうが、実は時間を潰すために、そういうことを言うのであります。大した問題もありませんから。

それで、先刻演題という話でしたが、演題というようなものはないから、何か好加減に一つ題は貴方がたのほうであとで拵こしらえてください。チョツと複雑すぎて簡単な題にならんような高尚な事なんだろうと思う。何かお話ししようと思いましたが、実は先刻申もうし上げたような訳で、時間もなし、今日も人が来ますし、チツとも考えられない。それだからという事はあまり大した事ではありま

せん。が、もう少しのあいだ、ごく雑ざつとしたところをお話して御免蒙こうむることにしましょう。

私はこのあいだ文展を見に行きました。（私は御存知のとおり、職業が職業ですから、お話する事は一般の事でも、あるいは文芸ということが例になったり、またそのほうから出立することが多いかもしれませんから、そのほうに興味のないかたにはお気の毒ですが、まあ仕方しかたがない、お聴きを願います。で、今申しましたように、このあいだ文展を見に行きました。それで文展を見てチヨツと感じました。どうも私は文部省の展覧会に反対を

したり、博士を辞したり、はなはだ文部省に受けが悪い人間であります。が今度の文展も公には書きませんでした。が、どうもたいへん面白くありませんでした。ことに私は日本画のほうで、まあそうだと思えます。西洋画のほうについても言えませんが、そのほうはあとにしておいて、日本画のほうについて申します。

いっこう面白くなかった。あの画えのうち、どれを見ても面白くない。なかには例外はありますけれども、どれを見ても面白くない。ただ面白くないと言っても分らぬから、訳を言わなくちやならんが、どれを見てもノツペ



リしている。ノツペリしているという意味はお手際てぎわが好いと言うので、褒ほめているのかと言えば、そうではない。悪く言う意味で、お手際がたいへん好よいのです。言葉を換えて言えば、腕力は有る、腕の力は有る。それじゃどこが悪いかと言えば、頭がない。頭がなくて手だけで描かいている。職人見みたようなものである。そうまでいうとお気の毒だから、それだけは公にしません。——これだけ公にしていれば沢山たくさんだが——私は別に画家や文展の非難を遣っているわけではありません、画家を個人的に悪口を言っているわけではありません。ただ感じたことにつ

いてチョツと必要だから申すのでありますが、たゞノツペリとしている。たとえばシミがなく、マダラがなく、ムラがなく、仕上げが綺麗きれいにできている。あゝいう手際というものは、丁稚奉公でっちをして五年十年遣らなければできなんでしょうけれども、それ以外に何かあるかと聞かれても、私には分らない。ちようど人間で言いますと、やはり紳士というものによく似ていると思う。紳士とはどんなものかというのと、紳士というものは、たゞノツペリしている。顔ばかりじゃありません。マナーが——態度および拳止動作が——ノツペリしている人間で、手を

出して握手をしたりする。下層社会の女などがよくあの人は様子が宜いということと言うが、様子が宜いくらいで女に惚れられるのは、男子の不面目だと思えます。様子が宜いというのは、人を外らさないとということになる。ただお座なりを言うということになる。あまりブツキラボーでない、当り触りが宜いというのでございます。鮮かだで穏かだまことに宜い。それは悪い事とは思いません。そういう人に接しているほうが野蛮人に接しているよりは宜い。一口感情を害してもすぐに擲られるというような人より宜い。それを攻撃するわけじゃありませんが、

しかしそれだけでは人格問題じゃない。人格問題じゃないというのはいづいぶん悪い事をして、人の金をたぐ取るとか、法律に触れるような事をしないまでも非道いずるい事をしたり、種々雑多な事をやって、立派な家にはいって、自動車なんぞに乗って、そうして会ってみるとまことに調子が好くて、品が好くて、ノツペリしている。そうして人格というものはどうかと言うと、あまり感服できない人がたくさん有りました。それが紳士だと思っではいけません。けれどもそういう者が紳士として通用している。つまり人格から出た品位を保っている

ほんとうの紳士もありましようが、人格というものを度外に置いて、たゞマナーだけをもって紳士だとして立派に通用している人のほうが多いでしょう。まあ八割くらいはそうだろうと思います。それで文展の絵を見てどっちのほうの紳士が多いかというところ、人格の乏しい絵だ。人格の乏しい絵だといって、なにも泥棒どろぼうが絵描えかきになつてゐるといふようなわけではない。そういう侮辱の意味じやない。けれども尊敬した意味じやむろんない。たいへんどうも頭が——なんと云つて宜いか——気高いというものが無い。御覧になつても分る。気高いといふことは

富士山やお釈迦様しやかさまや仙人などを描かいて、それで気高いというわけじゃない。たとえ馬を描かいても気高い。猫ねこをかいたら——なお気高い。草木禽獣きんじゆう、どんな小さな物を描かいても、描かいても、どんなインシグニファイカントな物を描かいても、気高いものはいくらかもあります。そういうような意味の絵にはどうも欠乏し切っているのが文展である。これを逆にいうと、そういう絵を排斥しているのが文展である。こういうわけであるから、それが一列一帯にチャンとお手際だけはできておらないといけない。お手際ができてない物はみな落第する——のですかどうか分からないが、

とにかくそういうことを私は文展において認め、かつその文展における絵の特色と人間の特色と相對していわゆるゼントルマンに比較して考えたのであります。

それからその次に、ある人が外国から帰って展覧会を開いた、それを見に往ゆきました。二人ふたりでありました。その一人ひとりの絵を見ると、油絵で西洋の色々な絵を描いている。アンプレツシヨニストのような絵も描いている。クラシカルな、ルーベンスなどに非常によく似たような絵も描いている。フランス派であるが、あれを公平に考えてみると、あの人はどこに特色があるだろう。他人ひとの絵

を描いている。自分というものがどこにもないようですね。巧い拙いにかゝわらず、他人の描いたようなものはいくらでも描くんですが、それじゃ自分はどこにあるかというところ、チヨツとどこにあるか見えないような絵を展覧会で見せられました。その次にもう一つの外国から帰った人の絵を見た。それは品の宜い、大人しい絵でした。それで誰が見ても、まあ悪感情を催さない絵でありました。私はそのなかの一つを買ってきて家の書斎に掛けようかと思いましたが、止よしました。けれども、まあ買っても宜いとは思いました。なぜ買っても宜いと言いま



すと、相当にできていますからです。内<sup>うち</sup>へ持ってきて掛けるのはなぜかと言うと、イギリス風の絵なら絵を、相当に描きこなしておつて、部<sup>へ</sup>屋<sup>や</sup>の装飾として突<sup>とつ</sup>飛<sup>び</sup>でない、ちようど平凡でチョツと好<sup>よ</sup>かろうと思つたから買ってこようかと思つたけれども、買ってきませんでした。その人の絵は誰が見ても習つた絵だということが分る。習つてある程度まで進んだ絵である。それだから見苦しくない、ということとは分る。その代りその作者を俟<sup>ま</sup>って初めて描けるような絵は一つもないのです。たとえばそのうちのーを選んで内に掛けるにしても、その特別なる画家

を煩わづらわささないでも、外ほかの人に頼んでも、それと同じよ  
うな絵ができそうな絵でありました。それから私はもう  
一つ見ました。これは日本にいる人で、日本にいる人の  
ある外国の絵でありました。まえの二つは帝国ホテルお  
よび精養軒せいようけんという立派な料理屋で見ました。お客様もど  
うも華はなやかな人が多い。なかには振袖ふりそでを着ている女など  
がおりました、あんな女などに解るのかと思うほどでし  
た。第三に見たのは、これはどうも反対ですね。所は読  
売新聞の三階でした。見物人は吾々くらいの紳士だけれ  
ども、なんだか妙な、絵かきだかなんだか妙な判じもの

のような者や、ポンチ画の広告見たような者や、長いマントを着て尖ったような帽子を被ったオランダの植民地にいるような者や、一種特別な人間ばかりが行っている。絵もそういうふうな調子である。見物人も綺麗な人は一人もいない。どうもその絵はそれである程度まではちゃんと整うてはいないと思います。しかし、自分が自分の絵を描いている、という感じは確かにしました。しかしその色の汚きたないほうの絵は未成品だと思えます。それだから同情もあり、それを描いた人に敬意も持ちますけれども、わざわざ金を出して内に買ってきて書齋に掛けよ

うと思わない絵ばかりでありました。

　　こういうふうにいるく違ふ絵があるからして、その点から出立してお話をしましょう。——それで文展の画家や西洋から帰って来た二人は自分で自分の絵を描かない。それから今の日本のほうのは自分で自分の絵は描くけれども未成品である。感想はそれだけですがね。それについてそれをフィロソフィーにしよう——それをまあこじつけてフィロソフィーにして演説の体裁にしようというのです。どういうふうにこじつけるかが問題であります。それが旨うまくゆけば聴かれそうな演説である。巧うまく

ゆかなければそれだけの話である。まあどういふふうに片かた付づけるかというお手際の善悪などはどうでもよいのですから。

人間というものはたいへん大きなものである。私なら私一人がこう立った時に、貴方がたはどう思います。どう思うと言ったところで漠然ぼくぜんたるものでありますが、どう思いますか。偉い人と速水君は思うか知らんが、そんな意味じゃない。私は往来を歩いている一人の人を捉つかまえてこう観察する。この人は人間の代表者である。こう思います。そうでしょう神様の代表者じゃない、人間の

代表者に間違まちがいはない。禽獣の代表者じゃない、人間の代表者に違ちがいない。したがって私がこゝにこう立っていると、私はこれでヒューマン・レースをレプレゼントして立っているのである。私が一人でたくさん有る人間を代表していると、それは不可いかん君は猫だと意地悪いじわるく言うものがあるかもしれぬ。もし貴方がたがこう言ったら、そうしたら、いや猫じゃない、私はヒューマン・レースを代表しているのであると、こう断言するつもりである。異存はないでしょう。それならば、それでよろしい。

同時にそれだけかというところでもない。じゃ何を代

表しているかというのと、その一人の人は人間全体を代表していると同時にその人一人を代表している。詰つまらない話だがそうである。私はこうやって人間全体の代表者として立っていると同時に自分自身を代表して立っている。貴方がたでもなければ彼方かなたがたでもない、私は一個の夏目漱石というものを代表している。この時私はゼネラルなものじゃない、スペシアルなものである。私は私を代表している、私以外の者は一人も代表しておらない。親も代表しておらなければ、子も代表しておらない、夫子ふうし自身を代表している。否いや夫子自身である。

そうすると、人間というものはそういうふうに通りを代表している——という用語弊が有るかもしれませんが——二通りになるでしょう。そこですく、それを言わないとよく解わからない。

それでこのヒューマン・レースの代表者というほうから考えて、人間というものはどんな特色、どんな性質を持っているか。第一私は人間全体を代表するその人間の特色として、第一に模倣ということを挙げたい。人は人の真似まねをするものである。私も人の真似をしてこれまで大きくなった。私のところの小さい子供こどもなども非常に人



の真似をする。一歳違いの男の兄弟があるが、兄あにき貴が何か呉れるといえれば弟も何か呉れるという。兄が要いらないと言えれば弟も要らないと言いう。兄が小便がしたいと言いえれば弟も小便をしたいと言いう。それは実にひどいものです。すべて兄の言うとおりをする。ちようどそのあとから一歩々々ついて歩いているようである。恐るべく驚くべく彼は模倣者である。

近頃読んだ本でありませんがマンテガツツアのフィジオロジー・エンド・エクスプレションという本のなかにイミテーションということについて例をたくさん挙げて

ありましたが、私は今一々人間というものは真似をするものであるということの沢山な例を記憶しておりませんが、こゝに二つ三つあります。たとえば、一人の人が往來で洋傘ようがさを広げてみようとすると、同行している隣りとなの女もきつと洋傘を広げるといふ。こういうふうふうに一般にある程度まではそうです。往來で空を眺ながめていると二人立ち三人立つのはわけはなくやる。それで空に何かあるかという、飛行船が飛んでいるわけでもなんでもない。けれども飛行船が飛んでいるとかなんとか言えば、大勢おおぜいの群集が必ず空を仰いで見る。その時に何か空中に飛行

船でも認めしむることができないともかぎらない。

それほど人間というものは人の真似なまをするようにできている情けないものがあります。それでその、人の真似をするということは、子供のうちから始まって、今言つたような些末さまつの事柄ことばかりでない、道徳的にもあるいは芸術的にも、社会上においてもそうである。むしろ流行などは人の真似をする。吾々がごく子供のうちは東京の者はこんな薩摩飛白さつまがすりなどは決して着せません。田舎者いなかものでなければ着ないものでした。それを今の書生はたいいていみな薩摩飛白を着る。安いからかしりませんが、みな着

るようになった。それから一時白い羽織の紐ひもの毛糸か何かの長いのをこう——結んで胸から背せ負おつて頸くびに掛けておつた。あれも一人遣やるとあゝなるのであります。私達私達の若い時は羽織の紋が一つしきやないのを着て通人とかなんとか言つて喜んでいた。それが近ごろは五つ紋をつけるようになった。それも大きなのがだんくく小さくなつたようだが、近ごろどのくらいになつてゐるのか。私は羽織の紋があまり大きいから流行おに後おくれぬように小さくしたくらいそれほど流行おというものは人を圧迫おして行く。圧迫するのじゃないが、流行おにこつちから赴おもむくのか。

です。イミテーターとして人の真似をするのが人間のほとんど本能です。人の真似がしたくなるのです。こういう洋服でも二十年前の洋服はあまり着られない。このあいだ着ていた人を見ただけでも可笑おかしいです。あまり見みつとも宜いものではない。ことに女なんぞは、二十年前の女の写真なんぞは非常に可笑しい。本来の意味では可笑しいとは自分で思っていないけれども、熟々よくよく見ると、やはり模倣ということに重きを置く結果、どうもその自分と異った物、あるいは世間と異ったものは可笑しく見えるのであります。そういうふうになそれを道德上にも応

用ができます。それから芸術上はむろんのことですね。そんな例はたくさん挙げてても宜いけれども、時間がないから略しておきます。とにかくたいへん人は模倣を喜ぶものだということ、それは自分の意志からです、圧迫ではないのです。好んで遣る、好んで模倣をするので。

同時に世の中には、法律とか、法則とかいうものが在あって、これは外圧的に人間というものを一束ひとたばにしようにとする。貴方がたも一束じっにされて教育を受けている。十把お一ひとからげにして教育されている。そうしないと始末おに終えないから、やむをえず外圧的に皆さんを圧迫しているの

である。これも一種の約束で、そうしないと教育上に困難であるからである。その約束、法則というものは政治上にも教育上にもソシヤル・マナーの上にも有る。飯を食べるのにサラ／＼グチャ／＼は不可いないという。そういうのはこれは法則でしょう。それから道德の法則、これは当あたり前まえの話で、金を借りればどうしても返さねばならぬようになってる。それから芸術上の法則というのがある。これがまた在来の日本画だとか、お能のうだとか、芝居しばいの踊りだとかいうものには、非常に究屈きゆうくつな面倒めんどうな固かたまった法則があつて、動かすことができないようになって

ております。それ等の例を一々挙げると宜いのですが、それは一々挙げません。例を省くと詰らないものになります。早く済みすますから、詰すらなくして早く切り上げてしまおうと思う。

それから、法則というものは社会的にも道德的にもまた法律的にもあるが、最も劇はげしいのは軍隊である。芸術にでもすべてそういうような一種の法則というものがある。それを守らなければならぬように周囲が吾人ごじんに責めるのであります。一方ではイミテーション、自分から進んで人の真似をしたがる。一方ではそういう法則が有



って、ほかの人から自分を圧迫して人に従わせる。この二つの原因があつて、人間というものの特殊の性というものには失われて、平等なものになる傾きがある。その意味で私なら私が、人間全体を代表することが出来る資格を有<sup>も</sup>ちうるのであります。

私は人間を代表すると同時に私自身をも代表している。その私自身を代表しているところから出立して考えてみると、イミテーションという代りにインデペンデントということが重きを為<sup>な</sup>さなければならぬ。人がするから自分もするのではない。人がそうすれば――

他人ひとは朝飯あさめしに粥かゆを食たう俺おれはパンを食たう。他人ひとは蕎麦そばを食たう俺おれは雑煮ぞうじを食たう、吾々われらは自分自分勝手かってに遣つかろうお前は三杯食たう俺おれは五杯食たう、というようようなそうそういう事ことはイミテーションイミテーションではない。他人ひとが四杯食たえば俺おれは六杯食たう。それはイミテーションイミテーションでないかしらぬが、ことによると故意こゝろに反対はんたいすることもある。これは不可いけない。世よの中には奇人ひとなみというものがありまして、どうも人並ひとなみの事ことをしちやあ面白おもしろくないから、なんでも人ひととは反対はんたいをしなければ気が済すまない。なかには広告こうこくするためためにやる奴やつもある。普通ふつうのことでは面白おもしろくないから、何か特別とくべつな事ことをしてみたい

というので、髪の毛を伸ばしてみたり、冬夏帽を被ってみたり——それはこゝの生徒などにもよく有る。が、あれは無頓着むとんじゃくからくるのでしよう。人が冬帽を被っているということに気が付けば自分も被りたくなるでしよう。故意に俺は夏帽を被ると言ったひにはよほど奇人となる。私のこゝにインデペンデントというのは、この故意を取り除ける。次には奇人を取り除ける。気が付かないのも勘定の中にはいらぬ。それじゃあどうなのがインデペンデントであるか。人間は自然天然に独立の傾向を有っている。人間は一方でイミテーション、一方で

独立自尊、というような傾向を有っている。そのうちで  
區別してみれば、横着おうちやくな奴と、横着でない奴と、横着  
でないけれども分らないから横着をやつて、まあ朝八時  
に起きるところを自然天然の傾向で十時ごろまで寐ねてい  
る。それはインデペンデントには違いないが、はなはだ  
どうも結構でないことかもしれません。それは我儘わがまま、横  
着であるが自然でもある、インデペンデントともなるけ  
れども、これも取り除けということになる。最後に残る  
のは——貴方がたのなかでよく誘惑ということを言いま  
しょう。人と歩調を合わして行きたいという誘惑を感じ

ても、いかんせんどうも私にはその誘惑に従うわけにゆかぬ。ちようど跛を兵式体操に引き出したようなもので、いかんせんどうも歩調が揃そろわぬ。それは、諸君と行動をともにしたいけれども、どうもそうゆかないので仕方がない。こういうのをインデペンデントというのです。もちろんそれは体質上のそういう一種のデマンドじゃない、精神的の——ポジチブな内心のデマンドである。あるいはこれが道德上に発現してくる場合もありましよう。あるいは芸術上に発現してくる場合もありましよう。精神的になつてくると——そうですね、古臭ふるくさい例を引く

ようであります。坊さんというものは肉食妻帯をしない主義であります。それを真宗しんしゅうのほうでは、ずっと昔から肉を食った、女房を持っている。これはまあ思想上の大革命でしょう。親鸞しんらん上人しょうにんに初めから非常な思想があり、非常な力があり、非常な強い根底の有る思想を持たなければ、あれほどの大改革はできない。言葉を換えて言えば親鸞は非常なインデペンデントの人と言わなければならぬ。あれだけのことをするには初めからチャンとした、シツカリした根底がある。そうして自分の執るべき道はそうでなければならぬ、ほかの坊主と歩調をと

もにしたいけれども、いかんせん独り身ひとみの僕はたゞ女房をもちたい肉食をしたいという、そんな意味ではない。その時分に、今でもそうだけれども、思い切って妻帯し肉食をするということを公言するのみならず、断行してごらんなさい。どのくらい迫害を受けるか分らない。もつとも迫害などを恐れるようではそんな事はできないでしょう。そんな小さい事を心配するようでは、こんな事は仕切れないでしょう。そこにその人の自信なり、確乎かっこたる精神なりがある。その人を支配する権威があつて初めてあゝいうことができるのである。だから親鸞上人は、

一方じゃ人間全体の代表者かもしれんが、一方では著しき自己の代表者である。

今は古い例を挙げたが、今度はもっと新しい例を挙げれば、イブセンという人がある。イブセンの道徳主義は御承知のとおり、昔の道徳というものはどうも駄目だめだという。何が駄目かと言えば、あれは男に都合の宜いようにできたものである。女というものは眼中に置かないで、強い男が自分の権利を振り回すために自分の便利を計るために、一種の制裁なり法則というものを拵こしらえて、弱い女を無視してそれを鉄窓の中に押し込めたのが今日ま



での道徳というものであると言っている。それでイブセンの道徳というものは二色にしなければならぬのである。男の道徳、女の道徳というようにしなければならぬ。女のほうから見ますれば、それが逆にまあならなければならぬといふのです。その思想、主義から出発して書いたものがイブセンの作の中にある。最も著しい例は、ノラというようなものであります。それがイブセンという人は人間の代表者であるとともに彼自身の代表者であるという特殊の点を發揮している。イミテーションではない。今までの道徳はそうだから、たといその道徳は不

都合であるとは考えていても、別にしようがないからまあそれに従っておこう、というような余裕のある、そんな自己ではない。もっと特別な猛烈な自己である。それがためイブセンはたいへん迫害を受けたというわけであります。むろん事実不遇な人でありました。そのみならずあの人は特殊な人で、人間全体を代表しているというより彼自身を代表しているほうがよほど多い。そこで国を出て諸方を流浪して、たまに国へ帰っても評判が宜くないから、国へはめったに帰らなかつた。ある時国へ帰って来た。国へ帰っても家がないから宿屋に泊ってい

る。その時ブランデスという人がイブセンが来たから歓迎会を開こうと言うと、イブセンはそんな歓迎会などは御免蒙ると言っている。しかしせつかくの催しで人数も十二人だけだからと言って、ようやくイブセンを説き伏せた。面倒を省くためにイブセンの泊っている宿屋で、帝国ホテルみたようなところで開くということになり、それでいよく当日になってちょうど宜い時刻になったから、ブランデスはイブセンの室へやに行つてドアをコツくと叩たたいて、衣服の用意はできたかと外から聞いたら、イブセン曰いわく衣服などは持つておらぬ、自分は決

して服装などは改めたことはない。シャツを着ている。シャツといつてもロシア辺では家の中ではこんな冬の日には温度が七十度くらいにしてある。本でも読む時は上うわ衣ぎをとっている。外に出る時はこういうものを着るでしょう。それでシャツを着ているのは宜いが、みんなは燕えん尾服びふくを着て来ているのだからという、イブセンは自分の行李こうりの中には燕尾服などははいつていない、もし燕尾服を着なければならぬようなら御免蒙ると言う。お客を呼んで、そのお客が揃っているのに、御免を蒙られては大変だから——そんなことを言わないでどうか出てもら

いたい、それじゃ出るといふことになつたが、ブランデスが実は十二人だつたところが、だんくくと人数が殖え<sup>ふ</sup>て二十四人になつたといふと、そんな嘘<sup>うそ</sup>を吐<sup>つ</sup>くならもう出ないといふ。実に手古摺<sup>てこず</sup>らされたといふことをブランデス自身が書いている。そんな事でいろいろ面倒なことがあつたすえ、ようく連れて行つてチャンと坐<sup>すわ</sup>らせた。ところが大将大いにふくれていて一口も口を利<sup>き</sup>かない、黙っている。まだ面白い話があるけれどもまあこれくらいで切り上げてしまひましょう。とにかく人間を代表しても<sup>けだもの</sup>獣を代表しても、イブセンはイブセンを代表して

いると言ったほうが宜い。イブセンはイブセンなりと言ったほうが当っている。そういう特殊な人であります。

この話は幼稚でありますが、今のイブセンの道德の見解からいっても、イブセンはイミテーションという側の反對に立った人といわなければならぬわけであります。

それで、人間にはこの二通りの人がある。というと、片方と片方は紅白見たように別れているようにみえますが、一人の人がこの両面を有っているということが一番適切である。人間には二種の何とかがあるということをよく言うものですが、それはたいへん間違まちがいだ。そうす

ると片方は片方だけの性格しか具そなえていないようになる。議論する人はそういうふうになるから、あとがどうも事実から出発していない議論におちい陥おちいってしまふ。とにかく二通りの人間が有るということを言うが、これはこの両面を持っていてというのが、これが本統の事でしょう。いくらオリジナルの人でもイミテーションの分子をどこかに持っている。イミテーションの側に立って考えると、これはどういう人がイミテーターかというところ、要するにイミテーターというものは人の真似をする。それだから自分に標準はない。あるいは有っても標準を立て

通すだけの強い猛烈な勇気を欠いているか、どっちかなのである。しかしながらインデペンデントの側の方は、自分に一種の目安がある。アイデアル・センセーション、それが個人的になっておって、とにかくそれを言い現わし、それを実行しなければいても立ってもどうしてもいられない。風変りふうがわではあるが、人からいくら非難されても、お前は風変りだと言われても、どうしてもこうしなければいられない。藪睨みやぶにらは藪睨みで、どうしても横ばかり見ている。これはインデペンデントのほうの分子をよけい有っている人である。だからこういう人というも



のはまことに厄介やっかいなもので、世の中の人と歩調をともにすることはできない。おい君湯に行こう、僕は水を被る、君散歩に行かないか、俺は行かない座禅をする、君飯を食わんか、僕はパンを食う、そういうようなインデペンデントな人になっては手が付けられない。とうてい一緒に住むことは困難である。しかし人に困難を与えるから気の毒な感じがないかと言うと、そうではない。ただそんな事は考えておられないのでしよう。それが本統のインデペンデントの人と言わなければならぬ。厄介ではあるけれども、イミテートする人あるいは自己の標準を欠

いていて差し障りさわのないほうが間違いがなくて安心だといふような人に比べれば、自己の標準があるだけでもこっちのほうが恕ゆるすべく貴とうとぶべし——と言つたらどんな奴が出てくるか分らぬが、事実貴ぶべき人もありませんよ。とにかくインデペンデントの人にはまあ恕すべきものがあると思うです。

元来私はこういう考えを有っています。泥棒どろぼうをして懲役ひとごころしにされた者、人殺ひとごころしをして絞首台に臨んだもの、——法律上罪になるといふのは徳義上の罪であるから公に所刑せらるるのであるけれども、その罪を犯した人間が、

自分の心の径路をありのまゝに現わすことができたならば、そうしてそのままを人にインプレッスすることができたならば、総ての罪悪というものはないと思う。すべて成立しないと思う。それをしか思わせるにいちばん宜いものは、ありのまゝをありのまゝに書いた小説、よくできた小説です。ありのまゝをありのまゝに書きうる人があれば、その人はいかなる意味からみても悪いということを行つたにせよ、ありのまゝをありのまゝに隠しもせず漏らしもせず描きえたならば、その人は描いた功德くどくによつてまさに成仏じょうぶつすることができるといふことができる。法律には触れ

ます懲役にはなりません。けれどもその人の罪は、その人の描いた物でじゅうぶんに清められるものだと思う。私は確かにそう信じている。けれどもこれは、世の中に法律とかなんとかいうものは要らない、懲役にすることも要らない、そういう意味ではありませんよ。それはよく申しますると、いかに傍はたから見て気狂じみた不道德な事を書いて、不道德な風儀を犯しても、その経過をなんにも隠さずに銜てらわずに腹のなかをすっきりそのままに描きえたならば、その人はその人の罪がじゅうぶんに消えるだけの立派な証明を書きえたものだと思っっているか

ら、さつき言ったような、インデペンデントの主義標準を曲げないということは恕すべきものがあるといったような意味において、立派に恕すべきであるということができると、私は考えるのであります。

しかしこういうふうインデペンデントの人というものは、恕すべくある時は貴むべきものであるかもしれないけれども、その代りインデペンデントの精神というものは非常に強烈でなければならぬ。のみならずその強烈なうえにもってきて、その背後にはたいへん深い背景を背負った思想なり感情なりがなければならぬ。いかにと

なれば、もし薄弱なる背景があるだけならば、いたずらにインデペンデントを悪用して、ただ世の中に弊害を与えるだけで、成功はとてできないからである。

こゝに成功という意味についても説明を要する。また強い背景ということについても説明を要するが、強い背景というものはなんだという<sup>しきた</sup>と、それは別なものではありません。たとえば私なら私が世の中の仕来りに反したことを、断言し、宣言し、そうしてそれを実行する。その時に、もしそれが根底のないことを遣っているならば、いかに私自身にはそれが必然の結果であり、私自身には

必要であろうとも、人間として他の人のためにならない。なんらの影響を与えることができない。なんらの影響を与えることができなければ、私は文字に現われたるインデペンデントであって、その文字に現われたるインデペンデントなことをして、最後に文字に現われたるインデペンデントで死ななければならぬ。人にはなんらの影響を与えざるのみならず、そのインデペンデントは人の感情を害し、法則というものに一種の波動を起して、人に一種の不愉快を醸かもさせるにすぎないのであります。それではどんなふうな深い背景を有っていなければならぬ

いかというと、たとえば非常に個人主義のようなフランス革命でも、明治改革でも宜<sup>よろ</sup>しゅうございます。徳川家が將軍に成つたすえであまり勢いは強くなかつたけれども、とにかく將軍というものが政權を持つておつて、そのうえに天子様がおられるという。これは一般の法則でないというところから、習慣的に続いてきた幕府というもの引<sup>ひ</sup>つ繰<sup>く</sup>り返したというのは、その引<sup>ひ</sup>つ繰<sup>く</sup>り返るといふ時の人の胸中に同情があつて、その同情を惹<sup>ひ</sup>き起すといふことができなければ、あれは成功はできないのである。だからいたずらにインデペンデントといふことは



不可<sup>いけ</sup>ない。人間の自覚というものは一步先へ先へとくるものである。一步遅れたら人より一步遅れて歩<sup>ある</sup>行かなければならない。人は相当の時期がくればそのとおりになるべき運命を持っているのだから、一步先に啓発しなければならぬ。それが強い深い背景と言え言える。それがなければ成功はできない。

成功ということについて歴史などの例を挙げたが、誤解されるといけないから、こゝに手近い例をもう一つ挙げておきたい。学校騒動があつてその学校の校長さんが代る。この学校ではありませんよ。そうするとあとに新

らしい校長さんが来ましよう。そうしてその学校騒動を鎮<sup>しず</sup>めに掛<sup>か</sup>る。その時はいろく思案もやりましよう計画も要りましよう。刷新もいろくありましよう。そうして旨<sup>うま</sup>くゆけばあの人は成功したと言われる。成功したと  
いうと、その人の遣<sup>やり</sup>口<sup>くち</sup>が刷新でもなく、改革でもなく、整理でもなくとも、その結果が宜<sup>よ</sup>いと、たゞその結果だけを見て、あの人は成功した、なるほどあの人は偉いということになる。ところが騒動がますます大きくなる。そうすると今まで遣ったその人のいっさいの事が非難せられる。同じ事を同じように遣っても、結果に行って好

ければ成功だというが、同じ事をしてても結果に行つて悪いと、すぐにあの人の遣口は悪いという。その遣方やりかたの實際を見ないで、結果ばかりを見て言うのである。その遣方の善よし悪あしなどは見ないで、たゞ結果ばかり見て批評をする。それであの人は成功したとか失敗したとか言うけれども、私の成功というのはそういう単純な意味ではない。たゞえその結果は失敗に終つても、その遣ることあたが善いことを行ひ、それが同情に値あたいし、敬服に値あたいする觀念を起させれば、それは成功である。そういう意味の成功を私は成功と言いたい。十字架の上に磔はりつけにされ

ても成功である。こういうのはあまり宜い成功ではないかもしらぬが、成功には相違ない。これはテンポラルな意味で宗教的の意味ではない。乃木<sup>の</sup>さんが死にまじたるう。あの乃木さんの死というものは至誠より出でたものである。けれども一部には悪い結果が出た。それを真似して死ぬ奴がたいへん出た。乃木さんの死んだ精神などは分らんで、たゞ形式の死だけを真似する人が多いと思う。そういう奴が出たのはかりに悪いとしても、乃木さんは決して不成功ではない。結果には多少悪いところがあっても、乃木さんの行為の至誠であるということはある。

なたがたを感動せしめる。それが私には成功だと認められる。そういう意味の成功である。だからインデペンデントになるのは宜いけれども、それには深い背景を持つたインデペンデントとならなければ成功はできない。成功という意味はそう言う意味で言っている。

それで人間というものには二通りの色合いろあいがあるということは今申したとおりですが、このイミテーションとインデペンデントですが、片方はユニテ——人の真似をしたり、法則に囚とらわれたりする人である。片方は自由、独立の径路を通って行く。これは人間のそのバライエテ

ーを形作っている。こういう両面を持っているのではありますけれども、まず今日までの改正とか改革とか刷新とか名のつくものは、そういうような意味で、知識なり感情なり経験なりを豊富にされる土台は、インデペンデントな人が出てこなければできないことである。もしそれができなかつたならば、吾々は吾々の過去の歴史を顧みて、いかに貧弱であるかということを考えれば、その人はいかに吾々の経験を豊富にしてくれたかということがよく分るのであります。その意味でインデペンデントというものは、たいへん必要なものである。私はイミテ

ーションを非難しているのではないけれども、人間の持つて生れた高尚こうしょうな良いものを、もしそれだけ取り去つたならば、心の発展はできない。心の発展はそのインデペンデントという向上心なり、自由という感情から来るので、吾々もあなたがたもこの方面に修養する必要がある。そういうことをしなくても生きてはいられます。また自分の内心にそういう要求のないのに、たゞその表面だけ突飛とつびなことを遣る必要はむろんない。イミテーションで済ましうる人はそれで宜よろしい。インデペンデントで働きたい人はインデペンデントで遣ってゆくが宜しい。

インデペンデントの資格を持っておって、それを抛ほうっておくのは惜しいから、それを持っている人はそれを発達させてゆくのが、自己のため日本のため社会のために幸福である。こういうのです。

繰り返して申しますが、イミテーションは決して悪いとは私は思っておらない。どんなオリジナルの人でも、人から切り離されて、自分から切り離して、自身で新しい道を行ける人は一人もありません。画かきの人の絵などについて言っても、そう新しい絵ばかり描かけるものではない。ゴーガンという人はフランスの人ですが、野蛮



人の妙な絵を描きます。フランスに生れたけれども野蠻地には行って行って、あれだけの絵を描いたのも、まえにフランスにおった時に色々の絵を見ているから、野蠻地には行ってからあれだけの絵を描くことができたのである。いくらオリジナルの人でも、まえにほかの絵を見ておらなかったならば、あれだけのヒントを得ることはできなかつたと思う。ヒントを得るといふこととイミテーションするといふこととは相違があるが、ヒントも一歩進めばイミテーションとなるのである。しかしイミテーションは啓発するようなものではないと私は考えている。

それから、イミテーションは外圧的の法則であり、規則であるという点から、ただ打ち毀<sup>こわ</sup>して宜いというものではない。必要がなくなれば自然に毀れる。たゞ、利益、存在の意義の軽重によつて、それが予期したより十年前におのずから倒れるか、十年後に倒れるかである。またオリジナルのほうが早く自然に滅亡するか、イミテーションの方がさきに滅亡するかであつて、大した違いはない。片方だけを悪いとは決して言わない。両方ともおの／＼存在するには存在すべき理由があつて存在しているのである。ことに教育を受ける諸君のごときものに

向って規則を無くしたら、とても始末が付かない。また兵式体操などもできない。子供のうちは親の言うことばかり聞いておつても、だんく一人前になつてくるとインデペンデントというものは自然に発達してくる。また発達してもしかるべきような時期に到着するのであります。一概にたゞインデペンデントであるということを中心とするのではないのであります。

けれども近來の傾向を見て、世の中の調子を見て、大体はインデペンデントに賛成である。今日の状況をもつて学校の規則を蔑視して自分勝手にしろというのではあ

りません。それは別問題ですが、今の日本の現在の有様から見て、どつちに重きを置くべきかというところ、インデペンデントというほうに重きを置いて、その覚悟をもつて吾々は進んで行くべきものではないかと思う。吾々日本人は人真似をする国民としてみずから許している。また事実そうになっている。昔は支那しなの真似ばかりしてあったものが、今は西洋の真似ばかりしているという有様ありさまである。それはなぜかと言うと、西洋のほうは日本より少しさきへ進んでいるから、一般に真似をされているのである。ちようどあなたがたのような若い人が、偉い人

と思つて敬意を持つてゐる人の前に出ると、自分もその人のようになりたいと思つて——かどうかしらんが、もしそう思うと仮定すれば、先輩が今まで踏んで来た径路を自分もひととおり遣らなければ、こゝに達せられないよ  
うな気がするごとく、日本が西洋の前に出ると、こゝに達するにはあれだけの径路を真似て来なければならぬ、  
い、こういう心が起るものではないかと思つて。また事實  
そうである。しかし考えるとそう真似ばかりしておらな  
いで、自分から本式のオリジナル、本式のインデペンデ  
ントになるべき時期はもうきても宜しい。またくるべき

はずである。

日露戦争というものははなはだオリジナルなものであります。インデペンデントなものであります。あれをもう少し遣っておったならば負けたかもしれない。宜い時に切り上げた。その代りたくさん金は取れなかった。けれどもとにかく軍人がインデペンデントであるということとはあれで証拠立てられている。西洋に対して日本が芸術においてもインデペンデントであるということももう証拠立てられても可い時である。日本は動もすれば恐露病に罹<sup>か</sup>ったり、支那のような国までも恐れているけれど

も、私は軽蔑している。そんなに恐しいものではないと思っ  
ている。これはあなたがたを奨励するためにこうい  
うことを言っているのである。それからまた日本人は雑  
誌などに出るちよつとした作物を見て、西洋のものとは  
とんど比較にならぬと言うが、それは嘘です。私の書い  
た小説なども雑誌に出ますが、それをいうのじやない。  
間違えられては困る。それ以外のもので、文壇の偉い人  
の書いたものはたいてい偉いのです。決して悪いものじ  
やありません。西洋のものに比べてちつとも驚くに足ら  
ぬ。ただ豎たてに読むと横に読むだけの違いである。横に読

むとたいへん巧うまいように見えるというのは誤解でありま  
す。自分でそれほどのオリジナリティーを持っていながら、  
自分のオリジナリティーを知らずに、あくまでもどうも西  
洋は偉い／＼と言わなくても、もう少しインデペンデ  
ントになって、西洋をやつつけるまでにはゆかないまでも、  
少しはイミテーションをそうしないようにしたい。芸術  
上ばかりではない。私は文芸に關係が深いからとかく文  
芸のほうから例を引くが、その他においても決して追おっ  
着かないものはない。金の問題では追っ着かないかしら  
ぬが、頭の問題ではそんなものではないと思っっている。



あなたがたも大学をお遣りになって、そうしてますますインデペンデントにお遣りになって、新しいほうの、本当の新しい人にならなければ不可いけない。蒸返むしかえしの新しいものではない。そういうものではないけない。

要するにどっちのほうが大切であろうかというところ、両方が大切である、どっちも大切である。人間には裏と表がある。私は私をこゝに現わしていると同時に人間を現わしている。それが人間である。両面を持っていなければ私は人間とはいわれな**い**と思う。たゞどっちが今重いかと言うと、人といっしょになって人の後に喰くっ付っいて

行く人よりも、自分から何かしたい、こういうほうが今の日本の状況から言えば大切であろうと思うのであります。

文展を見てもどうも、そっちのほうが欠乏しているように見えるので、特にそういう点に重きを置いて、御参考のために申し上げたような次第であります。

(筆記による)





日本文学電子図書館

---

模倣と独立

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第11巻」角川書店  
昭和42年7月30日 7版発行

---

日本文学電子図書館